

「甘え」で文学を解くと……

足立 節子

「甘え」で文学を解くと、人間の心が解ける。古典も近年の流行るもの、ロシアもドイツもイタリアもアメリカも韓国も日本も、成人向けも児童向けもみんな自分のうちに興味深く取り込んでしまう。

これは各論者が「甘え」の心性を作品の中から拾い出すことによって馴染みのない、ときには難解な作品を私たちが知っている感情に還元してくれたからだ。カフカ（はじめ歐米の人々）には「甘え」という感情はありながら、それが言語化しなかつたゆえに作品が難解に「変身」してしまったのだし、李箱の「不可解な新心理主義小説」「翼」における倒錯した夫婦の世界はわかりやすい甘えの原理が支配する世界となつた。

本書に收められた論文は單に文学作品に止まらず、その現れ方や認識の差違から、その作者の生きていた社会や文化、時代の価値観を浮かび上

がらせようとしている。だからドストエフスキイを甘えて解くと、理解はできるが多く日本人には許容できかねる人間像、したたかなまでに自力で生きいくことを放棄し

た人間、破滅的な「甘え人間」が登場する。しかもドストエフスキイはそんな彼らにも同情し、許しという癒やしが与えられる寛容な社会を考えて

いる。これはおそらく甘えを求める人間は信頼を寄せる度合いに応じて相手から許しと癒やしが得られる点だ。その結果甘えられる側は充足した感覚、存在感、所属感が得られる。（欧米ではキリスト教をはじめとする宗教や理想・理念がその

自らの内に抱いていたとされる「甘え」で分析してもすつき

一因は相互の信頼関係の未成立にあるのだが、それが成

立すればこうして破綻した人間関係や感情の修復が可能となるのだろう。ところが現代

の主な主人公たる日本人は、本書の中で吉本ばなや山田詠美が描く人間関係を崩壊だと懷古的に嘆かない

代替を果たしてきたと考へらるるうに、「甘え」が稀薄で感情の充実がない。生の躍動がない

いともいえる。表層的な円満

が甘えたがっている人が巷に明らかに溢れているのに、うまく甘えさせる能力を急速に日本人が失いつつあることなの

だと思う。今一度、自分のうちに甘えの肯定的な作用を本書で解き直してみたらいいがどうつか。

が精神学者の目でコメントしている。各作品分析から現代の反応を通すと、現代の諸相がより身近な問題として迫つてくる。

「甘え」の最大の効用、そ

れはおぞらく甘えを求める人間は信頼を寄せる度合いに応じて相手から許しと癒やしが得られないことに悶々としている姿だ。

一因は相互の信頼関係の未成立にあるのだが、それが成

立すればこうして破綻した人間関係や感情の修復が可能となるのだろう。ところが現代

の主な主人公たる日本人は、本書の中で吉本ばなや山田詠美が描く人間関係を崩壊だと懷古的に嘆かない

いともいえる。表層的な円満

が甘えたがっている人が巷に明らかな溢れているのに、うまく甘えさせる能力を急速に日本人が失いつつあることなの

係、人間感情の「健全さ」とはなかを問いかけてくる。と呼ばれてきたようだ。本書は十七の論文が三部に分類され、各部の終わりに「日本の構造」の著者、土居健郎が精神学者の目でコメントしている。各作品分析から現代の反応を通すと、現代の諸相がより身近な問題として迫つ

る側面は、男たちが妻となる対象の女性に「母」を求めて一方的に思い込んだり裏切られたりし結果充足感が得られないことに悶々としている姿だ。

それは信頼関係の上に成り立つ甘えの充足感を知らない立派な日本人において、「母」を求めて一方的に思い込んだり裏切られたりし結果充足感が得られないことに悶々としている。日本が戦後然と知っている。日本が戦後取るやつになった子育ての方針、「甘えさせないではやく自立させ」たことの結果らしいことも。だからといって「母」の喪失た、即「家庭の崩壊」と懷古的に嘆かないではない。幼児体験が「甘え」を基盤にした人間関係を築く上で決定的なのは言うまでもないが、問われているのは子供を身近にいとし思い、信頼関係が築ける存在の喪失なのだ。問題なのは、潜在的に甘えたがっている人が巷に明らかに溢れているのに、うまく甘えさせる能力を急速に日本人が失いつつあることなの



弘欣也
川田平鶴編

「甘え」で文学を解く